



## 着物文化の中で 大切な役割を持つ家紋

### 最初の頃は単純な幾何学模様の組み合わせ

紋章を誰が最初に考え出したのかは不明ですが、平安時代に貴族が乗る牛車の輪の中心部に付けた模様紋章の始まりとされています。その後武士が台頭し、戦の時に敵味方の区別をつけるため、旗指物などに文様を入れるようになりました。最初の頃は見分けるための目印であったため、丸や三角、直線などを組み合わせた簡単な幾何学的なものが多かったようです。

戦国時代になるとそれまでの幾何学的なものから、植物や動物などをデザインした複雑な図柄までさまざまな紋章が登場して来ます。徳川家の葵の御紋も戦国時代につくられたと言われています。江戸時代に家紋をもつことを許されたのは基本的には武士と農民だけであったとされています。農民の場合は植物を図案化した紋章が多いともいわれています。こうして家紋自体が家柄や権威の象徴にもなっていました。

### 数万種にも及ぶ家紋の種類

礼装用の着物には家紋が付いているのが普通で



す。明治時代になり洋服を着用する人が増えていきますが、昭和30年代頃までは、かしこまった席や儀礼の場などでは着物で望む人がたくさんいました。家紋に入った着物を身につけるだけで心が引き締められるという人もいます。紋章は単なるデザインではないのです。紋章上絵の需要もかなりあり、戦前は愛知県下に150人ほどの職人が活躍していました。ところが着物離れによって紋章上絵の需要も減退していきます。

紋章は着物と共に発展してきた文化です。家紋の種類は大雑把に見ても約3,000種類、さらに細かく見ると数万種にも及ぶとされています。しかも一つひとつを丁寧に手で書き込んでいくのです。紋章上絵は着物文化と一体になった日本が創り出した文化です。着物が廃れていくなかで紋章を残す方法として以前に考え出したのがワッペン式の家紋です。携帯電話をはじめ、人のものとの区別をつけるための小道具として利用してもらおうというものです。さらに、人づくりに役立つため、紋章上絵の文化を残そうと励んでいます。



#### DATA ■愛知県紋章上絵業組合

所在地：守山区森孝一丁目1622

- ・明治時代に、その後の組合の母体となるような組織があり、組合員数は150名以上
- ・平成23年：組合員8人